

『こころの病を 診るということ 私の伝えたい精神科診療の基本』

青木省三＝著

2017年発行
3000円＋税 医学書院



(書評者)
精神看護専門看護師
精神科認定看護師
認定看護管理者
フリーランス看護師(株式会社ここから)
村本好孝

ワクワクしながら読む 小説のように

初めて手にして読み始めた時に一番に感じたのは「読みやすさ」である。まるで楽しい小説を読み進める時のように、ワクワクしながらもスムーズに入っていく。

患者や家族が最初に会えるのは「受付のスタッフ」であると著者は書く。いかに一緒に働くスタッフを大事に考えているか、スタッフの専門性を大切にしているかがわかる。

自分自身は看護師であるが、本書を読みながら、自分が支援していることや考えていることが間違っていないと感じることができた。その時に、少し「ほっ」とする自分がいた。日々の臨床では、どうしても自分たちのやっていることが「本当にいいのか……」と思う機会が少なからずあるからだ。

本書には、著者が日々の臨床で患者や家族にかかわる時に考えていること、聞いていること、また、診るためにどのような工夫をしているのか、どのような言葉をかけているのかが丁寧に書かれている。まさに実際ににかかわってきた方々とのやり取りがある。

症例としてさまざまな疾患や背景をお持ちの方が紹介され、具体的ななかかわり方を学ぶことにつながる。多くのコミュニケーションの具体的な方法に加えて、コミュニケーションの意義を学ぶことができる。

面接では、総合された情報から生活史を理解し支援

が始まる。「仮説」「対応」「ポイント」の詳細が書かれ、著者がどのようなことを考えてかかっているかを、実際に目の前で見ながら解説を受けているかのように学ぶことができる。

「薬物療法」では、具体的な処方内容よりも、著者の姿勢や考え方が学べる。「精神療法」では、これが「人を癒すということか」と共感する。発達障害への支援やトラウマ治療にも触れ、まさに今の臨床の悩みを解消してくれる。

もう1つ感じたのは、そのエピソードに登場する方たちが、生活者としての人生を感じさせる言葉で表現されていることである。生活している情景が浮かび、感情が伝わってくる。疾患への治療ガイドラインや方法を学ぶことも大切であるが、支援の対象である方を「患者」としてだけ診るのではなく、1人の人として、かけがえのない人生を歩んでいる方として診るということ。その基本があればこそ、その方が病になって支援者と出会った時、支援者が何をやる人なのかを学ばせてもらえる。学びというよりも感じさせてくれると表現したほうが適切かもしれない。それは、青木先生が後に続く後輩に伝えるように語りかけるように書かれているからだと思う（あとがきを読んで、やっぱり……と思った）。まさに副題にあるように、「私の伝えたい精神科診療の基本」の書なのだ。 **精**